

【審査論文】

隠された脅威 — 大航海時代の魔女シコラックス

服部久美子

A Hidden Threat A Witch Sycorax in the Age of Discovery

Kumiko HATTORI

要旨

エリザベス朝とジェームズ朝の日記や旅行記を読み解きながら、『テンペスト』における他者の表象を、キャリバンの母シコラックスを中心に考察する。『テンペスト』では、大航海時代、イングランド植民地計画に関わる航海記に刺激を受けて、南北アメリカの他者インディアンの脅威を征服する男性性が描かれている。『テンペスト』はパストラル・ドラマの枠組みを持ち、その中で男性性は古典的な魔術の世界と平行しながら、新世界発見と成功のテーマを展開している。この劇では、こういった新世界を築く男性性に対して、ギリシャ・ローマ神話に繋がる北アフリカの古典的な他者、邪悪な子を孕むシコラックスが対置されている。その隠された存在は、不在であるがためにパストラル・ドラマの枠組みを逸脱してしまう。舞台上で、母体である女性性が男性性への脅威となって立ち現れ、その脅威に対する不安がこの劇全体を支配していることがわかる。

キーワード：シコラックス (Sycorax)、アフリカ (Africa)、他者 (Others)、航海記 (Voyage)、日記 (Journal)、母体 (Matrix)

序

記録によると『テンペスト』は1611年11月1日ホワイトホールでジェームズ王の前で上演され、1612から1613年のクリスマスの時期に皇女エリザベスとパラタイン選帝侯フレデリックの結婚祝賀で再演された。1597年にジェームズ王（シェイクスピアが所属する劇団のパトロン）が自ら『悪魔学』を書いていることや、16世紀後半から17世紀初めに多く書かれていた魔女処刑の記録を読むと、超自然の力がエリザベス朝とジェームズ朝の人々の関心の的であったことがよく分かる。『テンペスト』でのプロスペローの魔術や妖精エアリエルの存在は、観客を劇場へと誘う魅力的な吸引力であったろう。同時に、ファーマディナンドとミランダの婚約を祝福する女神の出現など、この劇には華麗で技巧的な娯楽に満ちた仮面劇としての要素も盛り込まれている。また、劇の最後で、プロスペローが全てを支配する神のごとき魔法の力を放棄し、1人の人間としてミラノに戻るというセリフの中に、当時の演劇の隆盛を担う大きな力であったシェイクスピアが、自らの引退を表すという意味が含まれていると考えられ、この観点からも『テンペス

ト』はファースト・フォリオ（1623年）の巻頭を飾るにふさわしい作品であるといえる。

一方、ポストコロニアル批評の中で『テンペスト』批評の対象となってきたのは、この島に住むキャリバンである。キャリバンとその母シコラックス、エアリエル他の妖精たちはプロスペローが漂着する前から島に住み着いていて、「新天地」の原住民と考えられ、支配者プロスペロー対原住民キャリバンという側面がクローズアップされてきた。エアリエルは従属する現地人の代表で、キャリバンは支配者に対する反逆者であるということもできる¹。ゆるやかな宗教政策を貫いたエリザベス女王の元、強力な中央集権国家として力を蓄えてきたイングランドでは、海軍力を生かした海外貿易が栄え、新天地を求め植民地開拓が盛んになった時代でもある。アルデン・T・ヴォーンとヴァージニア・メイソン・ヴォーンの『シェイクスピアのキャリバン』に詳細に研究されているように、キャリバンの出自はイタリアなどの西ヨーロッパから離れて、植民地計画の希望を託されていた「新世界」の西インド諸島へと向かう²。

『テンペスト』の材源としてニュールンベルクの劇作家ヤーコプ・アイラーの『美しきジデア姫』が良く取り上げられるが、この2作品以前に存在する似たような筋書きの演劇や物語が存在している可能性は大きい³。しかし、他を凌いでシェイクスピアが参考にしたと思われる材源は、当時流布していた海外冒険の報告である。『テンペスト』の制作年と考えられる1611年前後には、バーミューダ島での遭難が大きな事件として話題になっていた。『テンペスト』の材源はこの事件を詳細に報告したウィリアム・ストレイチーの書簡体記録「遭難の真実なる報告、ならびにトマス・ゲイツ卿の救済⁴」（1610年）であったと思われる（バーミューダ・パンフレット）。これは1625年に出版されるが、シェイクスピアは、ロンドンの知名人として東インド会社とつながりがあったと思われ、何らかの情報を得ていたと考えられる⁵。その他の材源としてシルヴェスター・ジョーダンの『バーミューダ島の発見』（1610年）がある⁶。ユダヤ人シャイロックやムーア人オセローを描いたシェイクスピアは、『テンペスト』で妖精エアリエルと非文明人で半人間のキャリバンを描く。しかし、材源の視点から考えると、『ヴェニス商人』はイタリアの物語集『イル・ペコロネ』で、『オセロー』はジェラルディ・チンツィオの『ヴェネツィアのムーア人』が主で、どちらもヴェニスという国際的な交易都市が背景である。名も知らぬ孤島が背景である『テンペスト』は、この意味で全く事情が異なる。舞台を魔法の支配する島として、プロスペローとミランダ、エアリエルや妖精、キャリバンだけを住人とした『テンペスト』では、「新世界」がどのように捉えられ、西欧文化にとって他者である島の原住民はどのように描かれているのだろうか。

この論文では、当時の新天地を求める航海記録、主に、『エリザベス朝ジャーナル』『第2エリザベス朝ジャーナル』『ジェームズ朝ジャーナル』『第2ジェームズ朝ジャーナル』の1585年から1610年までのイングランドの日誌から、植民地計画に関する航海記や、その他の旅行記を取り上げて、キャリバンの母シコラックスに焦点をあてながら『テンペスト』の中の他者の特質を明らかにしたい。

1. 新発見と冒険の時代

シェイクスピアが活躍して引退するまでの間、また、その前後も、イングランドでは海洋探検と植民地計画の記録が多数出版されていた。現代とは比較にならない数少ないメディアの中で、新たな情報の流布に大きな役割を果たしていたのは、こういった記録や日誌であった。ここで、航海記を綴った日誌からいくつかの例を取り上げて、当時の情報の発信の特質を明らかにしてみたい。

1595年9月14日

キャプテン・エイミアス・プレストンはアセンション号でウェールズのミルフオオード・ヘヴェ

ンに帰着した。6ヶ月前に航海を始め、マデイラ島の北方に位置するポルト・サント島でポルトガル国王兵を急襲し、小競り合いの末町を占領した。その後キャプテン・ソマーズとその船ギフト号、他の三隻の船と合流し、その後西方へ向かい、ドミニカ島へ、そこからインディアンが真珠を採るマルガリータ（バルセロナ北東・訳注）へと向かった。7月、セント・アントニー岬沖で南アメリカのガイアナ発見から戻る途中のウォルター・ローリー卿とその艦隊に出会う⁷。

ここには、ポルトガル兵士を急襲したという事実が記されているのだが、植民地計画先進国であるスペイン、ポルトガル、オランダと競合して、島の領有権や植民地を拡大していこうとするイングランドの様子が描かれている。アメリカ大陸の植民地化は、ジェノバ生まれのジョヴァンニ・カボートがヘンリー7世の命を受けて遠征を行った1497年に始まっている。実際にはこの植民地化は失敗しているが、彼は3人のエスキモーをイングランドに連れて帰り、見世物にした⁸。ローリー卿はこの報告の前年1594年に遠征隊を派遣し、ロアノーク島入植を企てるがやはり失敗している。ローリー卿本人は別の遠征隊でガイアナ（ギアナ）を発見するが、1814年までガイアナの完全な植民地化は行われなかった。

1596年7月25日

キャプテン・ローレンス・ケイミスはガイアナへの二度目の航海をした。彼はガイアナの川、人々、町、それぞれの町の長について多数報告した。ウォルター・ローリー卿が捕えたスペイン人の陳述によると、ローリー卿がガイアナを出て、わずか15人の兵士を連れてトリニダードに戻ったところ、現地人に襲われて2～3人が殺され、カカリ川にあるスペイン人の要塞へと逃げた。また、トリアワリ王が死に、後に残された息子ヒュー・ゴールドウィンはタイガー⁹に食べられた¹⁰。

このガイアナへの再度の航海は失敗に終わったのだが、ここでは、入植計画の中心人物の1人であったウォルター卿の現地人との戦いなどの冒険談だけではなく、イングランド人がタイガーなどの野獣に襲われる危機というセンセーショナルな情報も加わっている。この記述にも、度重なる危機を乗り越えて海洋探検を繰り返すローリー卿の勇敢さが伝わってくる。

1597年7月5日

3月にマスター・ウィリアム・パーカーはアントニー・シャーリー卿とジャマイカ島で出会い、トルヒーヨ（現ホンジュラス北岸の町・訳注）まで同行した。パーカーはケープ・デ・コトチェへ向かってユカタンの東部にあるケープ・デスコノシドまでやってきた。サン・フランシスコ近くに上陸し、カンペチェ町を襲った。そこには町の長と船アルケイダ号と500人のスペイン人がいて、近くの二つの町には8000人のインディアンがいた。インディアンは二度目の来襲で一行のうち6人を殺し、パーカー自身も左胸の下に銃弾を受けた。パーカーは作戦を変えて、既に捕虜としていた町の人々の手と手をつなぎバリケードの代わりとして敵の銃弾を防ぎ、無事に港に戻った。国王からの銀の貢ぎ物や他の品々を大砲と共にプルデンス号に回収した。その後セボという人口300～400のインディアン町を襲い、そこでカンペチェ・ウッド、ロウ、蜂蜜を見つける。その後ケープ・デ・コトチェへ戻るが、アドヴェンチャー号の13人の乗組員は二隻の快速帆船に襲われ、後にスペイン人によって皆殺しにされた。その海岸に5週間滞在し、彼らはバーミューダ島、ケープ・レース近辺を通り、7月3日にプリマスに到着した¹¹。（抄訳）

この報告には、マスター・ウィリアム・パーカーが海賊行為そのままに、縦横無尽に海洋を渡った様子が記されている。パーカーの負傷についての文章には、被弾にも関わらず勇敢に戦い、勝利を収めた様子が描かれていて、海賊行為を正当化する意味も言外に含ませている。インディアンとの壮絶な戦いの詳細や宿敵スペイン船との遭遇と戦いの危機、また、イングランド人と取引をする友好的なインディアンや異国情緒豊かな略奪品についても記されている。

1603年9月11日

東インド諸島との新たな交易を開く会社による船団が帰国の途についた。船は、船長のジェイムズ・ランカスター提督を乗せた旗艦であるドラゴン号以下、食糧輸送船を含めた5隻である。途中でポルトガル船を捕らえ、ワイン、油、食べ物を獲った。アフリカの海岸沿いに下る間、多くの乗組員たちが壊血病に罹ったので、サルダニヤと呼ばれる町に立ち寄り、病人のためにテントをしつらえた。ここで牛と羊を求めて野蛮人¹²と取引をした。言葉を理解する者がいないので、提督がバベルの混乱の時代から全く変わっていない家畜言葉で現地人と話した。たとえば牛は「モー」(moath)、羊は「メー」(baa)という具合に。原住民は黄褐色の肌をしていて、喉のところで発声するしゃべり方をし、舌で雌鳥がヒヨコを呼ぶような音をたてるので、滞在中の7日間イングランド人は誰一人一言も彼らの言葉を理解できなかった。その場所を離れる前に105人が死亡した。――

11月、喜望峰を回ったが、乗組員が再び壊血病に罹り始めたので再び陸を探し、野蛮人と米・雌鳥・オレンジ・レモンやプランテインを交換した。4月にニコバル諸島に到着した。この人々は麻布の腰帯以外は裸で、乗組員を極度に恐れた。頭には一対の角をつけ、顔を緑と黒と黄色に塗り、尻上部にはしっぽをつけ、まるで彩色した布を纏った悪魔のようだった。1602年6月5日に彼らの目的地であるスマトラ島のアチェ港に着いた。アチェ国王に女王の親書を渡すと、国王は敬意をもって彼らを迎えた。彼らは9月、胡椒を買い付ける商人を残して乗船した。途中ポルトガル船と戦い、勝利して、この船から更紗やホロホロチョウ950パックを奪った。10月末、彼らはアチェに戻り、国王の歓迎を受け、また、バンテン王国でも国王(10才位)に歓待され、自由交易の許可を得た。提督はモルッカ諸島での取引のために小型帆船と乗組員と商人を残し、イングランドから来る次の船に備えて交易所を作った。一行はマダガスカル島の近く危険な嵐を経て帰国の途についた。喜望峰で雹と雪を伴う逆風に苦闘しながらも、9月7日、無事にランズ・エンドに近づいた¹³。(抄訳)

この記述では、アフリカの原住民との取引の様や、異なる言語間でのコミュニケーションという珍しい情報が伝えられている。壊血病にかかるという長い航海での苦労や、それを乗り越える知恵や工夫も描かれ、東インド諸島の国々の王との交流など、当時の人々にとって非常に興味深いと思われる情報も添えられている。特に注目されるのは、原住民の外見はまるで悪魔である、というキリスト教的解釈が記述されていることである。最初は身につけているものなどの外観で人間を判断するという当時の価値判断の様式は、このような出版物によって再生産され、当時のイングランドの人々や後世へと受け継がれてゆく。次の船団来港に備えて、交易地などの配備についても述べられ、入植の準備が着々と進行している様子が描かれる。更に、イングランドへ向かう船が嵐や悪天候に会い、命からがら帰国する状況の詳細な描写など、常に危険と隣り合わせの冒険談が続く。

1604年9月12日

3月23日に ダウンズを出航したキャプテン・チャールズ・リーは5月10日、アマゾン川河口に到着した。そこからウィアポゴ川へ航海し、現地の人々から、蜂蜜、パイナップル、プランテイン、ジャガイモ、カサバ（パンやワインの原料・訳注）、ハム、アナウサギ、食用豚などで歓待を受けた。主立った地位にいるインディアン（その中の2人はイングランド語が話せた）と何度も話し合いをした結果、現地の人々がキャプテン・リーと乗員がそこに留まること喜んでいることを知った。キャプテン・リーが他の土地を探したいと願い出ると、彼らはすでに耕してある庭付きの家に住むよう提案し、彼はその申し出を受け入れた。キャプテン・リーは35人の乗員を残し、残りの者はリーの兄であるオリーブ・リー卿への手紙を携えて、約束を守るための人質として主要な地位にいるインディアン4人を一緒に連れて帰国した。その場所で金は見つけられなかったが、サトウキビ、綿、上質の亜麻の生産が得られる見込みがあるようだ。キャプテン・リーは少なくとも100人の労働者と庭師、数名の大工が派遣されるようお願いしている¹⁴。

この記述は、金を求めて南アメリカ探検を行った数多くの探検の一例である。インディアンの部族によっては、イングランド語を話す者もいて、その仲立ちの下、取引を一層密にしていく様子が記されている。当時はインディアンをロンドンに連れ帰り、見世物としたことも多かったが、ここに書かれているように、原住民を交易の人質としてもイングランドに連れ帰っていることから、アメリカ原住民が少しずつイングランドの人々の目に触れる機会が増えていったことが分かる。キャプテン・リーの要望にあるように、その後、アメリカ大陸に専門の職人を水夫と共に送り出すようになり、入植計画が本格的に動き出している状況が分かる。

1605年5月15日

キャプテン・バーソロミュー・ゴスノルドは3年前にヴァージニアへ渡ったが、その地について詳細な報告を携えて帰国し、新たな植民地の必要性を強く主張した。ついにキャプテン・ジョン・スミス、キャプテン・エドワード＝マリア・ウイングフィールド等の協力を得た。20数年前に別のヴァージニア植民計画で、ウォルター・ローリー卿が帆船団でリチャード・グレンヴィル卿を派遣し、1585年に100人の乗組員を現地に残してきたのだが、この人々は現地人と紛争を起し、ドレイク卿によって1586年6月に引き取られている。しかし、その間、ローリー卿は食料を積んだ100トンの救助船を送っていたが、その船の到着はドレイク卿の出発の後だった。この船から15人の乗組員がこの国の所有権を得るために2年間の食料と共に残された。翌1587年、ローリー卿はマスター・ジョン・ホワイトの統治の元150人の集団を送り込むことで植民計画を続行した。彼らが上陸すると、既に野蛮人が密かにこの地を襲い、15人の居住者のうち殺された者も、逃げた者もいたことが判明した。逃げた者の行く方は分かっていない。この計画は前回同様に失敗し、数週間後この集団は必要なものを調達するためにイングランドに戻った¹⁵。

この日誌は、ゴスノルドが3年にわたるヴァージニア植民から帰国し、新たな賛助者を得たという報告なのだが、20年以上も前のヴァージニア植民の1回目と2回目の失敗も繰り返し語られて、英雄ウォルター・ローリー卿やフランシス・ドレイク卿以下多くの冒険者たちの回を重ねる植民地獲得の試みが、困難な経緯を経ながら続けられていることが記されている。膨大な数の原住民に対して、非常に少ない数の

入植者たちの安否に対する気遣いや、取り残された人々の救助に向かうという情報は、入植の過酷な状況を補って、入植を志す人々の希望を繋ぐ役割をしている。

1607年8月18日

キャプテン・ニューポートがヴァージニア120マイル内陸で大きな川の中心にある島に乗組員を残して、ヴァージニア探検から戻った。彼らはその土地の大気や土壌の状態について賛辞を書いている。しかし、金や銀は見つけれず、原住民ともうまくいっていない。彼らは防備を固めてジェームズタウンという小さな町を建てた。先週ウォルター・コープ卿の友人であるキャプテン・ワーナムという人がケント港で逮捕された。彼は同僚たちを裏切り、ヴァージニア攻撃を打ち砕く方法をスペイン人に教えたと考えられている。議会は、こういった全ての努力に対して二倍の補助金を送ることを決議した¹⁶。

1607年ジェームズタウンが作られ、ヴァージニア入植は本格化した。この後ヴァージニア・カンパニーと東インド諸島植民に関する記述が多く書かれていて、ヴァージニアへの植民、ジョン・スミスのジョージタウンでの冒険や活躍、また、ヴァージニア・カンパニーの試みや組織化などの報告が頻出する。

これらの報告を読むと、新大陸を目指した冒険家たちによる血湧き肉躍る体験が語られていることがわかる。古代の神話や英雄伝そのままに、過酷な航海を通して命を賭して新しい環境に挑み、逆らうものを征服していこうとする勇気と不断の努力と、成功と失敗とが、また、詳細に書かれた現地人との戦いや交流が、文化的に劣った者の発見が人々を熱狂させたことは想像に難くない。舞台上演じられる非日常の出来事が現実起こっていることを人々は実感し、そのドラマティックな要素は作り話である戯曲をも凌いだことだろう。また、このような報告は、シェイクスピアを始め劇作家たちにとって多くのインスピレーションの宝庫であったと思われる。イングランドでは、この間、アイルランドにおける戦い、エセックス伯爵の反乱、エリザベス女王の崩御とジェームズ王の戴冠、ガンパウダー・プロットなどがあり、こういった大事件を記す幾多の記述の中にあって、植民地計画の当事者たちの報告は、イングランドの人々に未知のものへの驚異と共に希望を、英雄たちへの賞賛と同時に羨望を抱かせたことだろう。と同時に、このような記述は人々に大いなる恐怖や脅威を掻き立てたことと思われる。

2. 『テンペスト』の舞台・無人島

プロスペローが幼いミランダと共に漂着した島を特定する多くの試みがある。ジョゼフ・ハンターがチュニスとイタリアの間にあるランペドゥーサ島を、ウィリアム・ベルがギリシャ西海岸沖のコルシラ島を、その後1889年テオドール・エルツはランペドゥーサ島の隣にあるパンタラリア島を提唱している¹⁷。しかしヴォーンは、シェイクスピアが出典のよりどころとしたとする出版物について、シルヴェスター・ジョーダンの『バーミューダの発見、又の名を悪魔たちの島¹⁸』（1610年）をあげ、シェイクスピアが読んだ可能性を指摘しているように¹⁹、現在ではバーミューダ島が候補地として有名となっている。確かに、バーミューダ島は悪魔の島と呼ばれ、無人島であり、申し分の無い物語の舞台設定を提供したことだろう。海外旅行談や植民地計画に関する航海の報告を読むだけで、人々は多大な好奇心を覚えたはずであるが、ロンドンや地方でその物語が職業役者によって舞台上演じられるのを見るときには、報告を読むときとは全く異なる興奮があったはずだ。観客は舞台上の登場人物と自分を重ねて、冒険を疑似体験することができるからである。ここで、シェイクスピアが『テンペスト』を執筆したきっかけになったと思われる、ス

トレーチーのバーミューダ沖海難事故と生還についての記録を取り上げ、記録が演劇へ与える影響について考察してみたい。

1610年8月23日

トマス・ゲイツ卿はキャプテン・ニューポートとヴァージニアの朗報を携えてイングランドへ帰国した。バーミューダで建造された小船2つに乗って、乗員が全員無事に上陸した。昨年11月1日にヴァージニア艦隊は大嵐に遭遇し、ちりぢりになった。新しい自治委員会委員長であるトマス・ゲイツ卿、マスター・ジョージ・サマーズ、キャプテン・ニューポートを乗せたシー・アドヴェンチャー号は仲間の船と別れ別れとなり、船体はほとんどばらばらとなり、海水がオーカムから船にあふれてきて、瞬く間にバラストの上5フィートまで水が入った。3日4夜、彼らは揚水機を受け持ち、全員、提督さえ1時間揚水機で働き、1時間休んだ。巨大な海が巨大な雲の様に船を襲い、その凶暴さは操舵手から引き上げ装置を奪ったほどであった。彼がそれを再び捉えようとしたとき右舷から左舷へと投げ飛ばされ、身体が粉々にならなかったのは神の恩寵であった。この間空は真っ黒で北極星も太陽も見ることが出来なかった。ただ1夜だけ、かすかな星のような小さな丸い光が出現し、それは揺れてメインマストの上に流れて、時にはマストの先端から両側の舷に張ったロープの右から左へと一筋の光のようになった。そのようにして、彼らは火曜日から金曜日まで毎時間1200バリコスの水を船からくみ出し、その上、3つの大きな揚水機が4時間毎に100トンの水を排出した。ついにあらゆる望みが潰えたと思われたまさにそのとき、ジョージ・サマーズ卿が陸地を発見し、操舵手に向かうよう命令し、陸地から四分の三マイルのところで座礁した。そして、夜になる前に、総勢150人である男も女も子供も無事に島に上陸した。着いてみるとその島は、嵐や雷やその他の恐ろしいもので知られ、悪魔の島と呼ばれている恐怖のバーミューダ島（諸島）であることが分かった²⁰。（抄訳）

この記録には、更に、バーミューダ島に上陸した後、予想に反して、悪魔の島は豊富な食材と豊かな自然、穏やかな気候の楽園であったことが分かり、そこで彼らはしばらく滞在して船を作り、全員無事にヴァージニアのジェームズタウンへ着いた様子が描かれる。この書簡体記録の中に書かれた嵐の中を船上で最善を尽くす水夫たち、船上の人々の壮絶な絶望の叫び、怒りや恐怖、神に嘆願する様は『テンペスト』冒頭に簡潔に描かれる。また、この記録の「かすかな星のような小さな丸い光の出現」は、火の玉となって船上を飛び回ったというエアリエルのセリフに誇張した形で表されている。海難事故の悲惨さのあと、神の恩寵によるハッピーエンディングで終わる結末を持つこの事件のストーリーは、悲劇というより喜劇のジャンルに近い。この悲劇と喜劇の融合こそ、『テンペスト』の中でプロスペローが孤島を征服し、易々と復讐を達成する演劇上の枠組みなのである。

フランク・カーモードはアーデン版シェイクスピア『テンペスト』の序論で、1605年に上演されたサミュエル・ダニエルの『女王の理想郷²¹』と1608-9年頃に上演されたジョン・フレッチャーの『忠実な女羊飼²²』がイタリアのパストラル・ドラマ（牧歌劇）を模したものであると述べ、シェイクスピアが活躍する頃までには、ジョヴァンニ・バッティスタ・グアリーニの説が文学的知識として一般化されていたと書いている²³。このパストラル・ドラマとは、ギリシャのサチュロス劇に興味を持った16世紀後半のイタリアの初期ヒューマニストたちが、悲劇と喜劇に次ぐ三番目（悲喜劇・tragicomedy）のものとして考案した演劇のジャンルである。パストラル詩は古代ギリシャから始まり、宮廷や都市生活を離れた理想郷（ア

ルカディア)の田園を舞台に、牛飼いや羊飼いやなどの非現実的な生活が描かれる。ヨーロッパのルネッサンス期にはパストラル・ロマンスとして大流行し、16世紀後半のイタリアでパストラル・ファースや即興喜劇・コメディア・デラルテの延長として、トルクアート・タッソやガアリーニなどが新たな演劇のジャンルを創り上げた。このパストラル・ドラマはルネッサンス期のパストラル詩と違って、田園に都市(宮廷)の要素が組み込まれていると考えられている²⁴。ガアリーニは「パストラルとは道徳的で社会的に有益なジャンルであり、悲喜劇とは、喜劇を悲劇に無造作に付け加えたものではなく、両者を調和良く混ぜた第三のジャンルである。一方では高貴な人物が登場し、争いも無く、寓話…や適度に抑えられた喜怒哀楽と、悲しみでは無く喜びが、死を伴わない危機があり、他方では、抑制された穏やかさ、こしらえた作り話、幸福な『変化』、何よりも喜劇的な秩序がある²⁵」と論じている。

『テンペスト』には、植民地計画に関わる航海の報告にも書かれているような、命を賭した航海で数々の苦難に耐える船乗りの詳細や、度重なるインディアンによる虐殺や飢餓などに直面する入植者の悲惨な姿は見当たらない。しかし、死人や怪我人を一切出さない船の難破や、適度に穏やかな感情の吐露など、『テンペスト』がガアリーニの説のように喜劇と悲劇を調和させたパストラル・ドラマと考えれば条件は合致する。これまで見てきたように、当時、旅行記や航海記や日誌などで、植民地や現地人の様子の詳細がある程度明らかになっていたのだが、『テンペスト』では島の写実的な描写は少なく、劇の冒頭に置かれる嵐の場面の迫真性が際立つだけである。パストラル・ドラマの舞台設定として具体的な背景を持たない孤島は最適である。この島はプロスペローが思う存分白魔術師としての力をふるい、神に近い存在となって君臨し、復讐計画を実行することができる場なのである。この伝統的なパストラル・ドラマの枠組みを持った島の主プロスペローは、航海記からの情報にみるように、新大陸でインディアンを征服し、新たな権力を構築する開拓者である男性性を表象すると考えられる。

プロスペローがたどり着いた孤島には、シコラックスが産み落としたキャリバンが妖精と共に住んでいた。『テンペスト』では、アロンゾー一行に付与されたストレーチーの書簡体記録の現実的な迫真性は、プロスペローやエアリエルが使う魔術と幻想に対置され、互いに共振しながら航海記録とは異なる世界が展開していく。ストレーチーの報告によると、嵐が頻繁に起こり、近くを通る船が難破することで有名だったために、バーミューダ島は「悪魔の島」と呼ばれていた。シェイクスピアは、ここを魔女の住む島と設定して、この島の先住民として魔女シコラックスを創作した。では、半人間キャリバンを産んだこの魔女シコラックスとは一体何者なのだろうか。

3. シコラックス

ミランダ以外に『テンペスト』に出てくる女性は、ステファノーの歌の歌詞の中を除くと、シコラックスとクラリベルである。2人共に登場人物としてではなく、舞台上で言及されるだけなのだが、共にこの作品の中で重要な地位を占めている。特にシコラックスは魔女として邪法も使うのである。

『テンペスト』の1幕2場でプロスペローは、「まだ仕事があるのですか?」²⁶と言ってプロスペローの命令に素直に従わないエアリエルに対して、シコラックスの魔法で12年間木の中に閉じ込められていたエアリエルを救い出したのは自分であることを思い出させる。観客はプロスペローのセリフ「この忌まわしい魔女シコラックスは、度重なる悪行と、人の耳にも恐ろしい魔術のために、お前も知っているようにアルジェから追放されたのだ²⁷」から、キャリバンの母親の出自を知らされる。プロスペローがキャリバンを呼びつける「おい、毒にまみれた奴隷。悪魔がああ邪悪な女に産ませた子²⁸」、また、エアリエルへの「おまえは忘れたか。年齢と悪事を重ねて腰が曲がったあの魔女シコラックスを²⁹」、「目の縁が青い邪

悪で醜いこの女は、子を孕んだまま水夫たちにこの島に連れてこられ、置き去りにされた³⁰」という彼のセリフからは、シコラックスが魔女と呼ばれる理由を知ることが出来る。キャリバンの悪態、「おれのお袋が、病んだ沼から大鴉の羽根で剥ぎ落としてきた毒の露が、おまえら2人に降りかかればいい³¹」には、魔女と関わりのある‘raven’という言葉が使われていて、キャリバン自身も母親が魔女であることを示唆する。シコラックスの神セテボスはパタゴニアの神なので、シコラックスがアフリカという側面からのみ創作されたと考えることはできないが、アルジェリア出身であるシコラックスはアフリカの民として、イングランド人にとってまだ新しい他者であるインディアンよりは馴染み深い異人である。

フランク・カーモードは、シコラックスはギリシャ神話に登場する魔女キルケとの名前の相似があるとし、キルケはコルキス出身でメディアとも関連があると説明していて、シコラックスとギリシャ・ローマ神話の関係を明らかにする³²。シコラックスは舞台が始まる時には既に死んで存在しないのだが、背後霊のようにキャリバンの周りを取り憑いていて、キャリバンがどんな教育を受けても教化されない野蛮性と邪悪さを持つ人間であることを強調しながら、劇全体を支配する。イングランドが南北アメリカ大陸を発見する以前から、西欧キリスト教社会にとってアフリカは常に他者であった。1600年に英訳・出版された、レオ・アフリカヌスの『アフリカ誌³³』にアフリカ人の生活や習慣、行動様式、高潔な性格などが書かれているが、同時に「アフリカ人が陥りやすい悪行」も言及されている。

彼ら異教徒は非常に貧しく、強欲である。理解力に乏しく、不可能と思われることも信じてしまうほどだまされやすく、生活の秩序や法にも無頓着で、いつも怒気を含んだ低い声でしゃべる。——傷つくことをいつも気にかけ、助けられたことはすぐに忘れる。いぎたなくもうけ話に熱中し、礼節や品行方正にはどうしても到達することができない。彼らは粗野で、生まれつき盗人で、詐欺師で、肉欲に陥りやすい。——ヌミディア人はベルベル人の中にあっても、喜んで肥料をまく農夫や皿洗いや馬番などの仕事をするので一番奴隷にふさわしい³⁴。

この描写からすぐに思いつくのはキャリバンである。この航海記からは、キャリバンが16世紀から17世紀初頭にかけて、アフリカ人の1つの類型として描かれていることがわかる。キャリバンの姿には、南北アメリカ大陸の原住民とアフリカ人の2つの他者が折り重なって見える。それだけではなく、観客はキャリバンの背後に魔女シコラックスという隠された脅威をもまた垣間見ることになる。母シコラックスは登場人物として舞台に現れない非存在であるために、観客の不安を一層掻き立てる。シコラックスは安全なパストラル・ドラマの枠組みからはみ出してしまふのだ。植民地計画のための航海記にほとんど登場しない人間の類型の1つは孕んだ女性である。危険な海を渡り、新天地を拓くのは男性性の英雄である。シコラックスも海を渡るのだが、それは悪魔の子キャリバンを宿したために、アフリカの地からさえも追放されたためである。エアリエルはシコラックスの目に見えない姿に怯え、キャリバンはその威を借りて悪態をつく。キャリバンの反逆を思い出して仮面劇を突然中止するプロスペローは、怒りの表現を借りてはいるものの、彼の意識下にはシコラックスへの恐怖があり、キャリバンを単純でコミカルな反乱者に留め置くことができないのだ。

4. クラリベル

ナポリ王の一行は皇女クラリベルの婚礼の後の航海で、プロスペローの起こした嵐に遭う。ゴンザーローがクラリベルをダイドーと喻えたとき³⁵、ウェルギリウスの古代ローマの壮大な世界が、ヨーロッパ

とアフリカ大陸を縦横に行き来するダイナミックな神話の世界が出現する。しかし、舞台上でゴンザロー、アントーニオ、セバスティアンとの間で交わされる会話の中のクラリベルは、イーニィアスとの悲恋で炎に身を投じた悲劇のダイドーではない。アントーニオとセバスティアンがおしゃべりなゴンザローの話の腰を折るコミカルな掛け合いの中で、クラリベルは観客に紹介される。ところが、その後すぐに、ナポリ王の弟セバスティアンが兄アロンゾーに投げたセリフ、「兄上、この大きな損失をされたことをご自分に感謝なさるといい。あなたの娘を嫁がせることでヨーロッパを祝福せず、その代わりに、アフリカ人に投げ与えたのですから。少なくとも兄上はクラリベルを自分の目元から追放したので、こんな風に涙にくれる理由ができたというわけです³⁶」、また、「私たち全員がそうしないよう跪いて兄上に懇願し、クラリベルの高潔な心はアフリカに嫁ぐことへの嫌悪と父への服従の両天秤の間で、どちらにするべきか揺れ動いていたのです³⁷」では、クラリベルは政略結婚の道具として、異教徒であり、他者であるアフリカ人に生け贄として差し出された高貴な白人女性となる。父権をもつとせず、果敢に主体的に恋を選ぶ他作品の女性たちとは違うのだ。クラリベルは「父親の庇護の元から、煤のように黒い胸³⁸」に嫌々嫁がされたデズデモーナなのである。ここにも、アフリカと女性性との関係が浮かび上がってくる。

次にクラリベルの名前が登場するのは、アロンゾーとゴンザローが眠っている間、アントーニオがセバスティアンにアロンゾー殺害計画を持ちかける場面である。ナポリ王子ファーディナンドが溺れ死んだと信じている2人は、アロンゾーの次の王位は当然クラリベルに行くという予想をたてる。セバスティアンのセリフ「そう、確かに兄の娘はチュニスの女王で、それにナポリ王国の跡継ぎだ。だが、2つの国にはいささか距離がある³⁹」に対して、アントーニオは「その距離の一步一步が、どうしてクラリベルにその距離を跨いでナポリに戻ってこさせるのか、と叫んでいる。クラリベルをチュニスに留め置いて、セバスタンを目を覚まさせよと⁴⁰」と応じている。ここで、アントーニオは‘pass over⁴¹’という意味で‘measure’という言葉を用いている。もしかしたらチュニス王の子供を宿して、遙かに遠いアフリカの地からイタリア半島まで一步一步を刻みながら、海を超えてナポリの王位を得ようと迫ってくるクラリベルのイメージが浮かび上がり、その想像は、アントニーやセバスティアンにとって大いなる脅威となる。ミラノを取り戻したプロスペローにとっても同様に、クラリベルはキャリバンを孕んで海を渡ったシコラックスそのもののイメージと重なるのだ。

5. 結論

エリザベス1世時代から、ドレイク卿やローリー卿を始めとする冒険家たちが私費を投じて、後には国家計画として新大陸発見と植民地獲得に関わる航海を進めていたイングランドには、様々な航海記や旅行記が残されている。植民地計画に関わる航海記は、一種のプロパガンダの役割もしていて、時には、情報源の不確かさもあったようだが、すべて当時の時代背景を知る貴重な資料である。ウィリアム・シェイクスピアは人気劇作家として有力貴族やジェントルマンたちとも交流があり、そのような日誌、報告、記録を読む機会もあり、宮廷内や国内の事件の詳細や噂などに精通していたと思われる。上流社会との交流で手に入れた情報は当然作品の中に投影されるので、演劇は一般の人々にとって大切な情報源であつたろう。今まで見てきたように、航海記に記述されている内容はどれもフィクションを凌ぐ興奮を読む人々に与えていたと思われるが、そのまま演劇に取り入れることは出来ない。演劇の舞台では、異なる資質を持つ役者たちがセリフを掛け合い、工夫した演技で常に新しい場を見せながら、始まりと終わりを持つ物語を紡いでいく。そのために、『テンペスト』の材源として考えられているストレーチーの書簡体記録や他の様々な航海記が演劇作品のどの部分に関わるかを正確に捉えることは難しい。当時の教養にはギリシャ・ロー

マの古典が必須であり、シェイクスピア作品の骨格をなすものである。しかし、時代は動き、近代科学の萌芽と共に航海術の発展が新大陸発見と植民地獲得競争へと世界を駆り立てる。シェイクスピアはヨーロッパ諸国が急速に近代へと向かう過渡期にあつて、新たな情報をヨーロッパの伝統的教養の枠組みの中に組み入れて戯曲を書いていた。

『テンペスト』の女性登場人物のミランダは清純無垢な女性の理想と考えられているが、その対極に位置し、実際に舞台上に登場せずに重要な役割を担うのが、キャリバンの母シコラックスとクラリベルである。特にシコラックスに表象される他者、北アフリカの黒人の姿は、ギリシャ・ローマの神話にも繋がり、『テンペスト』の中で、キャリバンの出自であるアメリカ大陸のインディアンと同じ地平に置かれる。航海記や旅行記に記されているのは、荒れ狂う海や危険な自然に立ち向かい、戦略や戦闘準備への情報も少ないまま原住民インディアンと戦い、征服し、新たな世界を作るために挑戦する雄々しい男性性である。『テンペスト』では、プロスペローに代表されるこの男性性は、既に死んでいる非存在のシコラックスを通して脅かされる。子を産むという豊穡な母体を持つ女性性は、悪魔の子キャリバンという新たな他者を産出する。決して排除できない母と子のこの再生産の繰り返しのサイクルは、パストラル・ドラマの枠組みを飛び出して、劇場の中に最後まで通奏低音のように不安を流し続けるのである。

注

- 1 近年、エメ・セゼール (Aimé Césaire) の『もう一つのテンペスト』(*A Tempest*) などのように、アフリカや中南米の人々による『テンペスト』の読み直しが盛んに行われている。
- 2 Alden T. Vaughan & Virginia Mason Vaughan, *Shakespeare's Caliban A Cultural History*, Cambridge University Press, 1991 『キャリバンの文化史』アルデン・T・ヴォーン & ヴァージニア・メーソン・ヴォーン著 本橋哲也訳 青土社 1999年
- 3 『征服の修辞学 ヨーロッパとカリブ海先住民、1492～1797年』ピーター・ヒューム著 岩尾忠太郎・正木恒夫・本橋哲也訳、法政大学出版局、1995年、123-5頁
Peter Hulme, *Colonial Encounters: Europe and the Native Caribbean, 1492-1797*, Routledge, 1992.
- 4 William Strachey, 'A True Reportory of the wreck, and Redemption of Sir Thomas Gates, Knight; upon, and from the Islands of Bermudas in Samuel Purchas, *Hakluytas Posthumus or Purchas His Pilgrims, 1625*'
- 5 『キャリバンの文化史』 pp.74-6 『シェイクスピアにおける交渉』スティーヴン・J. グリーンブラット著、酒井正志訳、法政大学出版局、1995年、227-8頁 Stephen Greenblatt, *Shakespearean Negotiation*, University of California Press, 1988. pp.147-9
- 6 *Shakespeare's Caliban A Cultural History*, p.24
- 7 G. B. Harrison, *A Second Elizabethan Journal*, Routledge & Kegan Paul, London, 1931, p.46
Richard Hakluyt, *The Principal Navigation, Voyages, Traffiques and Discoveries of the English Nation*, the edition in 8 vols. in the Everyman Library, vii. p.172 (1582年、1589年、1598-1600年) (以下Hakluyt's *Voyages*)
- 8 『テンペスト』エメ・セゼール、w.シェイクスピア・ロブ・ニクソン、アーニャ・ルーンバ著、本橋哲也編訳、インスクリプト、東京、2007年、321頁
- 9 'tiger'の主な生息地は東南アジアなので、南アメリカに生息するタイガーの一種であるか、または、東インド諸島の情報と混同している可能性がある。どちらにしても、自然の脅威の一つとして、読む者に大きな脅威を与えたに違いない。
- 10 *A Second Elizabethan Journal*, p.111 Hakluyt's *Voyages*, vii.358
- 11 *A Second Elizabethan Journal*, pp.195-6 See 25th April and 23rd May, 1596 Hakluyt's *Voyages*, vii.222
- 12 savages 当時は 'particularly applied to people in the uncultivated state of nature' の意味で使われた。Alexander Schmidt, *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*
- 13 G. B. Harrison, *A Jacobean Journals 1591-1610 vol. IV*, Routledge & Kegan Paul, London, 1941, pp.60-4
Samuel Purchas, *Hakluytas Posthumus or Purchas His Pilgrims, 1625*. MacLehose editions, 20vols, 1905, ii. 392-437 (以下Purchas' *Hakluyt*)
- 14 *A Jacobean Journals*, p.159 Purchas' *Hakluyt*, xvi. pp.309-23
- 15 *A Jacobean Journals*, p.204 Purchas' *Hakluyt*, xviii. p.298; *The General History of Virginia, in The Travels and Works of Captain John Smith*, edited by Arber and A.G. Baradley, ii. 384
- 16 G. B. Harrison, *A Second Jacobean Journal 1591-1610 vol. V*, Routledge & Kegan Paul, London, 1941, p.47 *State Papers Domestic for the Reign of King James I*, 28:34, preserved in the Public Record Office in London. These are briefly summarized

- in the *Calendars of State Papers Domestic*, edited by Mary Anne Everett, Green, 1857
- 17 『キャリバンの文化史』 p.67
- 18 Silvester Jourdain, *Discovery of the Bermudas*, p.5 Alexander Brown, *The Genesis of the United States*, 2 vols. (1890; repr. , New Russell & Russell, 1964), vol. I, pp.420-26
- 19 『キャリバンの文化史』 75-6頁
- 20 *A Second Jacobean Journals vol. V*, pp.217-8. William Strachey, 'A True Reportory of the Wrack, and Redemption of Sir Thomas Gates, Knight in Purchas *'Hakluyt'*, 1625 MacLehose edition, 20 vols, 1905, ixx. pp.1-66. Edited by Rev. C. W. Russell and John P. Prendergast, *Calendars of State Papers relating to Ireland*, vols. X, xi, xii, 1905, 12 : 41. Edited by W. K. Purnell and A. B. Hinds, *Manuscripts of the Marquis of Downshire preserved at Easthamstead Park, Berks*, vol. ii. *Papers of William Trumbull the Elder, 1605-10*. Appendix B of *The Tempest*, edited by Stephen Orgel, Oxford University Press, 1987, pp.209-219
- 21 Samuel Daniel, *Queen's Arcadia*, 1610
- 22 John Fletcher, *Faithfull Shepherdess*, 1608-9
- 23 William Shakespeare, *The Tempest*, the fifth edition of the Arden Shakespeare, edited by Frank Kermode, Methuen & Co. Ltd, 1954, lx
- 24 Robert Henke, *Pastoral Transformations: Italian Tragicomedy and Shakespeare's Late Plays*, University of Delaware Press, 1997, P.46-7
- 25 Giovanni Battista Guarini, Translation of F. H. Ristine, *English Tragicomedy*, 1910
- 26 William Shakespeare, *The Tempest*, edited by Stephen Orgel, Oxford University Press, 1987, I. ii. l. 242 'Is there more toil?'
- 27 *ibid.*, 263-67 'This damned witch Sycorax, / For mischiefs manifold and sorceries terrible / To enter human hearing, from Algiers / Thou know'st was banished--for one thing she did / They would not take her life'
- 28 *ibid.*, 319-20 'Thou poisonous slave, got by the devil himself / Upon thy wicked dam,---'
- 29 *ibid.*, 258-9 'Hast thou forgot / The foul witch Sycorax, who with age and envy / Was grown into a hoop?'
- 30 *ibid.*, 269-70 'This blue-eyed hag was hither brought with child, / And here was left by th' sailors'
- 31 *ibid.*, 321-22 'As wicked dew as e'er my mother brushed / With raven's feather from unwholesome fen / Drop on you both.' 'raven' のラテン語は 'korax / corax' で、明らかにシコラックスの名前の由来と関連がある。
- 32 *The Tempest*, edited by Frank Kermode, p.26 キルケは気に入った人間の男を島に連れて行って養い、飽きると魔法で家畜や動物に変えてしまう魔女。
- 33 Joannes Leo Africanus (c.1494-c.1554?), *Description of Africa*. 1550年にイタリア語で出版され、後に多くの言語で翻訳・出版された。
- 34 Edited by Andrew Hadfield, *Amazons, Savages & Machiavels Travel & Colonial Writing in English, 1550-1630*, Oxford University Press, 2001, pp.149-51
- 35 *ibid.*, 75 'Not since widow Dido's time.'
- 36 *The Tempest*, edited by Stephen Orgel, II. i. 121-25 'Sir, you may thank yourself for this great loss, / That would not bless our Europe with your daughter, / But rather lose her to an African, / Where she, at least, is banished from your eye, / Who hath cause to wet the grief on't.'
- 37 *ibid.*, 126-29 'You were kneeled to and importuned otherwise / By all of us, and the fair soul herself / Weighed between loathness and obedience at / Which end o'th beam should bow.'
- 38 Willima Shakespeare, *Othello*, The Arden Shakespeare, edited by M. R. Ridley, Methuen & CO LTD, 1959, I. ii. 70 'From her guardage to the sooty bosom'
- 39 *The Tempest*, edited by Stephen Orgel, II. i., 253-55 'Tis true my brother's daughter's Queen of Tunis, / So is she heir of Naples, twixt which regions' チュニスとナポリは地理的には近いのだが、心理的に遙かに隔たっている。
- 40 *ibid.*, 255-58 'A space whose every cubit / Seems to cry out, How shall that Claribel / Measure us back to Naples? Keep in Tunis, / And let Sebastian wake.'
- 41 Alexander Schmidt, *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*

服部久美子 (和洋女子大学言語・文学系教授)

(2012年11月20日受付)